
雨の中の散歩

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の中の散歩

【Nコード】

N8396E

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

パティスの目論見で、とんでもない格好をさせられて雨の中を歩かされるブレイズ。彼が、出向いた先で見たものは？（大人パティス&ブレイズ読切り番外編）「月夜に歩けば」シリーズです。http://syosetu.com/pc/main.php?m=wl-4&ncode=N2519Bhttp://syosetu.com/pc/main.php?m=wl-4&ncode=N3072B

（前書き）

「月夜に歩けば」シリーズの読みきり作品です。

関連作：

「月夜の約束」完結

<http://ncode.syosetu.com/n2519b/>

「光と闇の境界線」連載中

<http://ncode.syosetu.com/n3072b/>

俺は生まれながらの吸血鬼だ。

だから太陽光は勿論のこと、流水も大の苦手で――。

そんなだから雨が降る日には、例えそれが夜であっても外には出られない。

同居しているパティスの亡くなった母親――継母ではなく生みの親――は日本という東洋の小国の出身らしい。

そこには、そんな悪天候が幾日も続く梅雨という季節があるのだと前にパティスから聞いたことがある。

連日のように雨だなんて、考えただけで憂鬱だ。

俺の生まれ育ったこの国に、そんな時節がなくて良かった、と心底思ってしまうほどに。

「ね、ブレイズ！ 見て見て！ これ、素敵でしょ！？」

昨日からしとしとと降り続けている雨のせいで夜の散歩に出られずくさくさしていた俺の元へ、パティスが満面の笑顔でやって来た。

読むとはなしに目を落としていた本から視線を上げると、女性が持つには不釣り合いな大きなパラソルと、中身が見えない紙袋を手にしたパティスが立っていた。

「何するんだ、そんなデカイの」

……っていうかそれ、ビーチパラソルだろ。

言葉には出さず、胸のうちにそう付け加える。

パティスの傘なら玄関先に可愛らしい花柄のがあったはずだ。馬鹿みたいに太い軸を持つビーチパラソルよりよっぽどお似合いの傘が。

今彼女が手にしているそれは、パティスが持つには荷が勝ちすぎ

ている。

第一、重すぎるんだろ。

半ば引き摺るようにしてパラソルを携えたパティスに、俺は思わず溜め息を漏らした。

「決まってるじゃない！　これをさして今からブレイズとお庭を散策するの！」

呆れ顔で問いかける俺の視線をもとめせず、パティスがそう言い放った。

余りにハッキリした物言いに、呆氣にとられて思わず彼女に見入ってしまう。

しばし呆然と彼女を見詰めていたら、否応なく腕を掴んで立ち上がらされ――。

「……え？　あ、ちょ、ちょっと待て！　おま、それ……冗談だろっ？」

かろうじてそう反論すると

「冗談でこんなの持って来る馬鹿はいないと思うけど？」
振り返りもせずに一蹴されてしまった。

「けど、外は雨……」

一緒に暮らすようになって長いんだから、パティスは俺が雨の日に外へ出ることが無理だと知っているだろうに。

俺の手を引き歩き出すとするパティスに、「解ってるよな？」という気持ちを込めて告げると

「雨だからこれ、用意したんじゃない」

さすがに立ち止まってこちらを振り返ると、呆れ顔でパティスが言う。

これ、はどうやら馬鹿でかいビーチパラソルのことらしい。

俺が濡れないために自分の傘よりも数倍大きなビーチパラソルを持ってきたのだと得意顔で言う彼女に、

「上はともかく……足元がマズイだろ」

この際、パティスが傘の代わりに大きなビーチパラソルを使おう

としていることには目をつぶろうと決意する。

しかし――。

連日の雨が、屋外のそこかしこに大小様々な水溜りと、幾筋もの流れを作っているはずだ。

日没と同時に目覚め、昨夜雨で外出出来なかった鬱憤を晴らせるか気になった俺は、すぐに窓外を覗き見、そして

篠つく雨と、水浸しになった外の様子を見てガツカリしたのだ。流水に足を入れるのは、すぐに生死に関わることはないけれど、身体の動きを鈍らせることは確かだから。

ハッキリ言ってそうなるのかなりダルイし、気持ちのいいものではない。

頼むから勘弁してくれ。

そんな思いを込めて彼女の顔を見詰めると、パティスが得意そうにふふん、と鼻を鳴らした。

「そう言っと思って……」

声と同時に眼前に突き出された紙袋に、俺は思わず後ずさる。

「な、何だよこれ……」

差し出されるままに紙袋を受け取った俺は、中を覗き込んで困惑した。

二十センチぐらいの木板に穴が三つ空けられていて、そこへビロードのような生地が取り付けられている。裏面

には板と垂直に接する形で更に二枚の板が取り付けられていて――。

そんな見てくれるものが袋の中にふたつ。

「高下駄って言う履物らしいわ」

生地の部分に指を引っ掛けて履く、東洋の履物らしい。

裏面に取り付けられた二枚の板は「歯」と呼ばれる部位で、この部分が一般的な下駄ものより高いので、

「高下駄」と呼ばれているのだとパティスが説明する。

実際自分も良くは知らないらしいのだが、アンティークものを扱

う店の片隅でこの商品を見つけてぴんと来たのだという。

「これを履いたらブレイズ、雨の中でも水溜りに足が沈んじゃう心配、ないと思わない？」

にっこり。

これ以上ないというぐらい極上の笑顔で突拍子もない提案をする
と、パティスは俺に靴と靴下を脱ぐように促した。

「騙されたと思って履いてみて？」

もう、この段階で騙されていると思うのだが、パティスが余りに嬉しげにそう言うので、俺は渋々彼女の言葉に従った。

「何か気持ちワリィー……」

履き慣れないからだろうか？

親指と人差し指の間にはまる布地の感触に違和感が募る。

「履いてれば慣れるわ」

自分は履いたことがないと豪語したくせに、そんな無責任な太鼓判を押すと、パティスは

「さ、行きましょ？」

まるで長居は無用だともいう風に俺の手を掴んで歩き出す。

「ちょ、ちよつと待つ……」

慣れない足元によるめきながら何とかパティスに続く。

何だかんだ言いながらパティスの後を黙って付き従う自分に辟易しつつ、それでも前を歩くルンルン気分のパ

ティスが何だか無性に愛しくて……俺はもう少しだけ彼女のワガママに付き合ってみようかな？なんて考えてしまっ

高下駄を履いているせいだろうか。

いつもより十センチばかり高くなった視点で見ると、パティスが

物凄く小柄に見えた。

元々俺より十五センチばかり背の低いパティスだったが、今日は更にプラス十センチの身長差。

つむじがよく見えるな、なんて思いながら歩いていたら

「はい」

突如、引き摺りながら歩いていたビーチパラソルを手渡された。

気が付けばそこはもう裏庭へと続くテラスの前で――。

「え？」

無意識にそれを受け取りながら、思わずそう漏らすと

「こんな重い、私じゃさして歩けないよ」

当然のようにそう言い切られた。

（そんなに苦労してまで外に出る必要あんのかよ？）

視線を転ずれば、大降り、とまでは行かないまでも、糸のような雨が降り続いている。

内心その様に溜め息を漏らしながら、それでも普通の恋人同士のような時間を与えてやれることの少ない俺は、

この程度のワガママぐらい聞いてやるべきか、と思い直す。

「つたく……」

頭の中ではさつき生じた不満なんて一掃してしまっているというのに、素直じゃない俺は、さも不服だという顔をしてパラソルをさした。

（重っ……）

やっぱりこんな風に持つて歩くべき物じゃないだけあって、肩に持たせかけたそれは思いのほか重量があった。

一瞬ふらつきそうになった体勢を立て直したところで、パティスにそつと袖を引かれる。

「……ひとつお願いしてもいい？」

いつもより幾分控えめなパティスの様子に一瞬ドキッとさせられた俺は

「俺に出来ることなら」

なるべくパティスの顔を見ないよう前方に視線を向けたまま答えた。

「灯り、欲しいな、なんて……」

言われて初めて気が付いた。

自分が暗がりでも見通せる目を持っていて不便に感じなかったから、パティスのことを配慮するのを忘れていた。

それだけ自分にゆとりがなかったのだと思い知らされた気がして、俺は思わず苦笑する。

屋敷内の燭台にはいつも一定間隔で火を灯すようにしていた俺だったけれど、さすがに庭にまでは術を施していなかったのだ。

「……すまん」

指を鳴らして眼前に明るめの火の玉を呼び出してから、配慮の足りなさを素直に詫びた俺に、

「私こそワガママばかり言ってごめんね」

これまた余りにらしくないしおらしさで、パティスがぼつんと呟いた。

「いや、……まあ、その……、気にすんな」

パティスらしくない態度に、俺は困惑させられっぱなしだ。

「お、俺だって雨の日に外に出られる日が来るなんて思ったことなかったし……これはこれで……その、凄くいい

経験をさせてもらってると思うてる」

視点がいつもより高いせいもあり、傍らに寄り添うパティスの表情が見えなくて、俺は柄にもなく狼狽する。

おまけに履き慣れない下駄のせいで、足元ばかりが気になって仕方がない。

「ブレイズ、歩きにくかったら私の肩に掴まっていいよ？」

そんな俺の様子に気付いたんだろう。

パティスがそう、呟いた。

「あ、でもそれじゃ……」

男として情けなくねえか？

そんなことを思った俺だったが、

「ほら、遠慮しない」

そう言われてパラソルに掛けていないほうの手を掴まれては従うしかない。

パティスが一緒に住むようになってから、俺は極力彼女に触れないよう気をつけてきた。

およそ十年ぶりに再会したパティスは、会わないうちにすっかり大人の女になっていたから――。

ともすれば理性が飛んでしまうのではないかと、いつも懸念せずにはいられないほど。

（手を……出すわけにはいかねえんだ）

そう思うのにはちゃんとわけがあつて……。

それを考えるたび、俺は、自分の呪われた身の上を恨めしく思つてしまう。

普通の人間みたいに何も構えることなく好きな女に触れられたらどんなに幸せだろう。

性欲と食欲とが密接に関連してくる俺のような生き物には、甘美な誘惑は時に酷く辛いものとなる。

パティスは俺が吸血鬼だというのは知っている。しかし、俺は彼女の前で異形たる本性をさらけ出したことがないのだ。

そんなことをして彼女を脅えさせてしまったら。

そう思うと酷く怖かった。

「ブレイズ？」

考え事に没頭しすぎていたらしい。

怪訝な面持ちでパティスに顔を覗き込まれて、俺はハッと我に返った。

「あ、ああ、すまん」

謝罪はボーっとしてしまったことに対してか。それとどこかパ

ティスを信じきれずにいることに対してか。

「もお！　一緒に歩いてるときぐらいよそ事を考えないで欲しいな！」

ぷうつと頬を膨らませてパティスが言う。

下から見上げるようにして告げられた台詞と表情が可愛くて、俺は慌ててそっぽを向いた。

（……ッ。顔、赤くなってるの、気付かれてねえよなっ？）

そう。情けないことに、俺は一瞬にして頬が火照ったのを感じたのだ。

「ブレイズ？」

その仕草に、またしてもパティスがきょとんとした顔をする。

「あ、いや……」

（お前があんまり可愛いかったから……）

とてもじゃないけど言えるはずのない言葉を飲み込んで、俺は咳払いひとつでその場を何とかやり過ごそうと試みた。

「変なの……！」

幸いなことにそれ以上追究してくることなくパティスが笑ってくれた。

「ねー、見て！」

そんな感じで何が何だか分からないうちにパティスに引っ張られ、俺は庭の片隅に誘われていた。

「あのね、私、ずっとこれをブレイズに見せたいなって思ってたの！」

パティスが指差す先には雨に濡れそぼって薄ぼんやりと霞む、鞠のような花――。

「……アジサイ？」

「そう！」

勢いよく俺の言葉を肯定して嬉しそうに微笑むパティスに、

「俺だってこの花が咲いてるのくらい、見たことあるぞ？ わざわざ雨の日に見に来なくても……」

思わずそう、言ってしまうていた。

すると、パティスが一瞬呆気にとられた顔をして、

「お馬鹿さんね！ アジサイは元々海辺に自生してた植物なのよ？ だからね、雨の日に見るのが一番綺麗なの。」

ブレイズは今まで雨に濡れたアジサイを見たことがあるの？
と言った。

言われてみれば、俺はそんな状態のこの花を見たことがない。

「……ねえな」

仕方なく、ボソツとそう告げると、

「ね？ 雨の中で見ると一段と綺麗でしょう？」

ニツコリ笑ってパティスが俺の顔を覗き込む。

「あ……ああ、そうだな」

そんなパティスの顔を見て、俺は素直にそう言っていた。

ただし、花に対しての賛美ではなく、パティスに対して――。

たまには雨の中をこんな風にパティスと散歩してみるのも悪くねえな。

そんなことを思いながら――。

（後書き）

最後までお読みいただき有難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8396e/>

雨の中の散歩

2010年10月8日15時22分発行